IS〈インフィニット・ストラトス〉ー000ー

ネヘモス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第２回モンド・グロッソ決勝戦、織斑一夏と織斑マドカは誘拐される。その最中、一夏とマドカは謎の怪人の襲撃を受け、マドカが瀕死の重傷を負ってしまう。

一夏は望んだ。誰１人として死なせないだけの大きな力が欲しいと。

その欲望に惹かれるように１人の男が彼の前に姿を現す。

※２０１６／０９／１０　タグ変更

※２０１６／０９／１２タイトル変更

目次

メダルと出会いと謎の男 ―― 1
天災とグリードと欲望の王 ―― 9
一夏と白き欲望と黒兎の隊長 ―― 16
ウサギヤミーと偽物の世界最強と白の覚醒 ―― 23
第2のオーズと爬虫類コンボと黒兎との和解 ―― 33
告白と帰国と青髪の姉妹 ―― 42

メダルと出会いと謎の男

　この世界にはインフィニット・ストラトスと呼ばれる物が存在している。通称ＩＳと呼ばれるそれは宇宙開発を行うために作られたパワードスーツ。宇宙での活動を前提で作られたそれはとある事件によって世界に広まることになる。
「白騎士事件」、世界中のコンピュータが同時にハッキングされ１０００発を超えるミサイルが日本を襲った。その際、１機のＩＳ、後に「白騎士」と呼ばれるＩＳがそれらを全て撃ち落とした事により世界はＩＳの存在を認めるようになった。
　そう、兵器としての価値を見出すために。
　それを危惧した国連はＩＳの兵器転用を禁ずる「アラスカ条約」を締結、ＩＳは一種のスポーツとして認知される様になった。それと同時にＩＳの開発者にして生みの親の篠ノ之束もそれの心臓にあたるもの、コアを４６７個で作るのを止めた。そして、ＩＳの世界覇者を決めるモンド・グロッソ。第１回の世界覇者「織斑千冬」の連覇がかかった決勝戦が始まろうとしていた時に事件は起きた。
「ーーーーー!!」

ドイツのとある倉庫。そこに2人の少年少女が監禁されていた。少年の名は織斑一夏、少女の名は織斑マドカ、両名共に織斑千冬の身内である。

（くそっ！俺が警戒さえ解いていなければ！）

一夏は内心で歯軋りをしていた。一夏とマドカは言ってしまえば不意をつかれる形で誘拐された。決勝戦の姉の勇姿を見ようと会場に2人で向かった矢先、後頭部を殴られたのだ。そして、気がつくとこの有様だ。両手両足に視覚聴覚、ご丁寧に口までも塞いでやがる。

悲鳴すら上げさせる気は無いと言うことか。

「おい…！織斑千冬が決勝戦に出ているぞ！」

「どういう事だ!?日本政府には伝えたはずだぞ、これでは人質の意味がないではないか！」

どうやら、奴さんの企みは失敗に終わっているようだ。ちなみに今の台詞はどうやら英語では無いらしい。発音のイントネーションからして、ドイツ語。つまり、千冬姉を棄権させようとしていたのはドイツだということか。

「とりあえず、今回はこの2人の場所の情報を渡して…」

『その欲望、開放しろ』

チャリン…

「な、何だお前!?ーーーうわぁぁぁぁ!!」

何だ!?何が起きている!?この野郎、何かないか、何か…!

手元に鋭い感触、触った感じガラス片か何かだろうか。俺はそれを掴むと手首を縛っているロープに切り込みを入れて引きちぎる。そして目隠しを取った瞬間、後悔した。

緑色のクワガタのような怪人が誘拐犯と思しき男にメダルを入れて、そこからゾンビのような怪人をを生み出しているというショッキングな光景だった。

「あ、あ…」

声が出ない。そのあまりにも凄惨な光景を見たせいで言葉も出てこない。それでも1つ分かったことがある。

この場から逃げないと…

俺は足の拘束を解いてマドカを担いでその場を離脱した。そして、マドカを自由の身にする。

「ぷはっ!?お兄ちゃん、何が起きてるの!?」

「話は後だ!早くこの場を離れるぞ!」

「わかった…!?お兄ちゃん、伏せて!!」

マドカの警告に咄嗟に反応してその場に伏せる。そして、

グシャリ…

肉を抉るような音がした。
自分の伏せた床に異様な暖かさと鉄の匂いを感じた。自分の両手がヌメリと濡れるのを感じた。
「マド…カ…」
嫌な予感がする。頭を上げたくない。上げればどうなるか分からないから。だが、現実を受け入れる必要がある。
その現実は、余りにも残酷だった。
カマキリの様な怪人がマドカの心臓に当たる場所を貫き、そこから夥しい血が噴き出していた。
「織斑一夏、お前も、殺す！」
怪人が何か言っているようだったが、俺には何も聞こえなかった。
目の前の妹を、救えなかった。
もっと早く気づいていれば、俺が手を伸ばして助けられた。
もっと俺に力があれば、マドカを死なせずに済んだ。
怪人が鎌を振り上げる。だが、そんな事はもうどうでもいい。力が欲しい！
もう誰1人として死なせないだけの力が!!
「その子達から離れろ、ヤミー！」

突然、自分の背後から第三者の声が響いた。恐る恐る後ろを見ると、旗のような何かを持っている千冬姉と同じ年頃だろう青年が立っていた。
「き、貴様は!?」
「これを見れば俺が何しに来たかは分かるよな?」
そう言うと青年は3枚のメダルが入りそうなバックルを取り出し、それを腰に巻き付けた。そして、右から順に赤、黄、緑のメダルをそれぞれ1枚ずつ入れていく。すると、ベルトを傾けて右腰にあったツールでそれらをスキャンした。
キン!キン!キン!
『タカ!トラ!バッタ!タ、ト、バ!!タトバタ、ト、バ!!』
すると、青年の頭、胴体、足をメダルのような何かが覆い、胸には上からタカ、トラ、バッタをあしらったメダルのような紋様があった。
「オーズ!お前を先に始末する!」
「やれるもんならやってみな!」
オーズと呼ばれた青年の両腕が光ると、両腕にリーチの長いまるで虎のような鉤爪があった。オーズはそれをカマキリの怪人めがけて振り下ろす。
「ぐう!?」
それを回避できずにカマキリの怪人は攻撃をまともに受ける。その時、怪人の傷から

メダルが溢れていた。
「一気に行くよ!」
オーズはベルトをもう一度スキャンする。
『スキャニングチャージ!』
その音声が響くとオーズの足が緑に光り、バッタの様に跳躍する。限界まで跳躍した後、飛び蹴りをカマキリの怪人目掛けて放った。
「セイヤー!!」
カマキリの怪人は身体を貫かれ爆発四散、その場には大量の銀色のメダルが落ちていた。
オーズは変身を解くと一夏の元に駆け寄り、緑色の缶のプルタブを開ける。すると、それはバッタの形になりそこから聞き覚えのある声がした。
『いっくん!まーちゃん!大丈夫…じゃないね。アンくん、束さんが行くまでまーちゃんの命引き止めといて!後でゴージャスアイスあげるから!』
「その渾名は止めろ!」
すると、青年の背後から赤い腕が現れる。赤い、鳥のようなそれはマドカの右手に取りつくと融合した。そして、マドカは何事もなかったかのように立ち上がった。
「マドカ…?生きてるのか?」

「ちげーよ」

マドカの声で、マドカの姿をしたそれは否定した。

「これはあのウサギ野郎の場所に行くまでの繋ぎだ、俺が離れるとコイツも危ない、覚えとけ。だが…」

マドカの姿をした何かは一夏をまじまじと見つめると、ニヤリと口角を吊り上げた。

「映司！見つけたぞ、オーズの器を！」

「はい？」

この日、織斑一夏と火野映司、そしてグリードの1人アンクが出会った。この出会いは吉と出るか凶と出るのか、その結末は、神のみぞ知る。

「社長、火野さんから報告がありました。オーズを継げるかもしれない器を見つけたそうです」

「素??晴らしい!!」

とあるビルの最上階。ケーキ作りに勤しんでいた初老の男がいた。

「里中くん、その者を今すぐここに呼びたまえ！」

「お言葉ですが、その人は現在心理的な状態が宜しくないので今は篠ノ之博士の元に預けています」

「ふむ、分かった。では日を改めて会うことにしよう」
　里中と言われた女性はその場からいなくなった。鴻上は社長室で一年前に歌った曲を口ずさんでいた。
「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ．　Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ．　Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｄｅａｒ　」
　そして、プレートチョコの仕上げを終えた。
「２ｎｄ　オーズ」

天災とグリードと欲望の王

時を遡ること誘拐事件の前日、仮面ライダーオーズこと火野映司と鳥のグリード・アンクは鴻上ファウンデーションからの直々の依頼でドイツのモンド・グロッソ会場に来ていた。依頼主の名は篠ノ之束、ＩＳの生みの親にして稀代の大天災、そして映司の幼馴染みの女性だった。

「えいくん、久しぶりー！みんなのアイドル束さんなのだー！」

機械のウサミミをぴょこぴょこさせながら映司にハグをした。

「久しぶり、束ちゃん。いや、篠ノ之博士って言った方がいいかな？」

「もー、つれないなー。束さんとえいくんの間柄に敬称など必要ないのだー！」

「おい、映司。この脳内お花畑女は誰だ」

ビシッ…

映司でも分かるように束が濃密な殺気を放った。

「口の聞き方には注意した方がいいよ？グリード」

鋭い凶器のような殺気を向けられ、アンクは珍しくたじろいだ。

「あー…彼女は篠ノ之束。ＩＳの生みの親って言えば分かるか？」
「ＩＳ…。ああ、あのでかい機械か？確か、この世の中が女尊男卑とか言う訳の分からん風潮に染まった原因の」
「えいくん、少し離れてて。このグリード一回殺すから」
　するとどこから出したのか彼女は仕込み刀を取り出し、それを居合のように構えた。アンクも臨戦態勢になっている。アンクが止まるとも思えないし、仕方ない。映司は咄嗟に後ろから束に抱きついた。
「ふえ!?え、えいくん!?」
「束ちゃん、落ち着いて。とりあえず、依頼のことを聞きたいんだけど」
「う、うん。わかった…」
　殺伐とした空気は映司の咄嗟の行動で収束した。この時束の顔が終始真っ赤だったのは言うまでもない。
「ゴホン。じゃあ依頼について説明するね。えいくんと、とりあえずアンくんはモンド・グロッソは知ってるよね？」
「おい、何だその嫌な渾名は!?「何？鳥頭グリードが良かった？」…好きにしろ…！」
「気を取り直して、そのモンド・グロッソにちーちゃん、織斑千冬が出てるのは知ってる？」

「えっ？千冬ちゃんがモンド・グロッソに出てるの!?」
「えいくんホントに世事に疎くなったね。まあ、放浪生活が続いてるから尚更か。実際、鴻上ファウンデーションに来るまでＩＳの存在すら知らなかったぐらいだし」
「まあ、理由については聞かないでくれると助かるよ」
「じゃあ本題。もしかすると決勝戦の当日にいっくんとまーちゃん、ちーちゃんの弟妹が誘拐されるかも知れないんだよね。だから、陰ながらでいいから彼らを護衛してくれないかな？」
「え？そんなの政府に頼めば…「多分亡国機業（ファントムタスク）が一枚噛んでると思うよ？」…それじゃあ政府の護衛はダメだね」
　亡国機業、人間でありながら世界を終焉に向かわせ、グリードによる支配を企む今の映司達の敵。
「わかった、今すぐドイツに飛ぶよ」
　その数時間後、彼らはドイツのモンド・グロッソ会場に辿り着き、数匹のタカカンに周囲を見張るように命じた。そして、１匹のタカカンから一夏とマドカが誘拐されたという事実を聞いた。
「アンク！」
「待て、映司。あの廃工場からウヴァの気配を感じる。もしかすると…」

「ヤミーがいるってことか！」
「映司、今のうちに持っとけ！」
　アンクから3枚のメダルが投げ渡される。赤、黄、緑のそれらは幾度となく映司を救ってくれたタトバコンボのそれだった。
　そして、廃工場に辿り着くと濃密な殺気を感じ取った。更に止めと言わんばかりに強烈な鉄の匂い…。嫌なビジョンが頭をよぎる。
????????????????????
　その現場に行ってみると、心臓を貫かれた少女とまさに殺されそうになっている少年が目に入った。
「その子達から離れろ、ヤミー！」
「……カ?……かり……ろ…」
　朧気に声が聞こえる。私は何をしてるんだ?確か、兄さんを化け物から庇って、その後変なヤツがいきなり現れて…。
　それ以降の記憶がない。そこで気絶したのか。てことは…
「ここは、あの世か…」
「マドカ！しっかりしろ!!」
　え?ゆっくりと瞼を上げる。するとそこには血相を変えた姉さんがいた。

「ここ…は…？」
「お？目を覚ましたかい？ここは鴻上ファウンデーションの集中治療室だ。お嬢ちゃん、運が良かったな。心臓を掠めるギリギリだったんだ、紙一重でどうにか助かってるぜ」
　すると、姉さんの背後から無精髭を生やした白衣の男が入ってきた。
「おっと、1つ断っておくが、俺はお嬢ちゃんの身体に触ったりはしてないからな。担当の女医に指示を送っただけだからな」
「ありがとうございます、伊達先生」
　この男の名前は伊達と言うらしい。姉さんが言うにはこの人が私の手術の指示を出していたらしい。
「いいってことよ！火野ちゃんの知り合いの身内が瀕死の重傷って聞いたからには医者以前に一人の人間として放っておけないからな。それに、先生はとってくれ。俺そういう柄じゃないから」
「ありがとうございます…伊達さん…」
「おう、それじゃ俺は仕事が入ったからこれで。そうそう、一夏くんからアンタらに伝言」
「そう言えば、一夏は何処だ？鴻上ファウンデーションに保護されたと聞いているが」

そう言えば兄さんの姿が見えない。どこにいるのだろうと思った矢先、
「あ、千冬ちゃん。久しぶり」
この声は、意識が途切れる直前に聞こえた男の人？
あれ？何でだ？自分の目の前にいる姉が顔を真っ赤にしている。滅多にそんな顔しないはずなのに。
「え、えええ映司!?」
「え？そんなに驚くの？中学校以来会えるから楽しみにしてたのに」
「どうかしましたか、映司さん…って千冬姉！マドカは、起きたのか！」
もう1人の男性、映司と呼ばれた青年の後ろから兄さんが顔を出し、私の顔を見るやいなや速攻で駆けつけて手を握りしめた。
「ゴメンな、マドカ。俺、もっと強くなりたい。だから千冬姉、俺をドイツに連れていってくれ！」
兄さんは私から手を離すと姉さんに向かって土下座した。
後から聞いた話だが、映司さんが化け物を倒した後、姉さんが暮桜ごと廃工場に突っ込んできてドイツ軍に一時的に助けてもらったらしい。情報提供がドイツからだったため、姉さんはドイツで一年間ＩＳ部隊の教官を勤めるそうだ。兄さんはそれに便乗してドイツに、ついでに映司さんもドイツに行くそうだ。理由は教えてくれなかった。私

は一年間絶対安静の後、しばらく篠ノ之束博士に預けられるとのこと。

そして、この会話の後、私達兄妹が再開するのは2年後の夏になる。

一夏と白き欲望と黒兎の隊長

鴻上ファウンデーション社長室。そこで火野映司、織斑一夏、アンクが社長の鴻上光生と面会していた。

「ハッピーバースデー！２番目のオーズ!!」

「あの、２番目とかオーズとか、一体何の話をしてるんですか？」

「俺が説明してやる」

鴻上社長の意味不明な発言に疑問を持った一夏にアンクが簡単に説明をした。

まず、オーメダル。これは人の欲望が生み出すメダルで８００年前の錬金術師によって生み出され、１枚でも膨大な力を秘めているということ。そして、誘拐事件の際に現れた緑色の怪人とアンクがそれによって作られた「グリード」と呼ばれる存在であるということ。

次に、オーズとはそれの頂点に君臨する「欲望の王」と呼ばれる存在であること。ところが８００年前、オーズは大量のオーメダルを体に取り込んで自爆、アンクを含めた５体のグリードと共に石櫃で８００年の眠りについていたこと。

「メダルにも種類があってな、まずお前がヤミーから出てくるのを見たセルメダル、そし

て、オーズの変身とグリードの構成に大きく関わるコアメダルが存在する。簡単に言えばな…」

アンクは1本のアイスキャンデーを取り出した。

「アイスの部分がセル、棒の部分がコアになってるのがグリードで、棒の無いアイスがヤミーだ」

「俺の時と同じ説明だな」

「あってるから問題ないだろ」

映司さんも同じ説明を受けたのかと意外に思った一夏だった。

「さて、本題はここからだ。里中くん、例のものを」

すると、里中と呼ばれた女性秘書は白いガントレットを一夏に差し出した。

「何ですか?これ」

「これはドクター篠ノ之がキミのために用意した絶大なる力、オーズの力を宿したＩＳだよ!」

「え?いや、俺は男ですよ!?ＩＳを動かせる訳ないじゃないですか!」

「織斑マドカくんがヤミーに殺されかかった時にキミは力を欲した、違うかね!」

確かにそうだ、だけどそんな事で男がＩＳが動かせるなんて…

「まあ急くことはない。そのうち私の言ってることの意味が分かるようになる」

「じゃあ話題を変えますが、２番目のオーズってどういう意味ですか？」
　確かアンクさんはこうも言ったはずだ。封印を解いた人間しかオーズにはなれないと。
「実はね織斑一夏くん。ドクター篠ノ之がオーズドライバーを解析した結果、面白い事が判明したのだよ」
「あの脳内お花畑女！いつの間にそんな事を!?」
「えいくんが変身してる時にデータを盗んでいたのだー！」
　突然社長室に束が現れた。
「とりあえず、オーズのデータを取ってて分かった事があるよ。これは世の中を変えるようなとんでもな話だけど、ＩＳが女性にしか動かせないって言うのは周知の事実だよね？」
　いきなりだが、確かにＩＳというモノは何故か女性にしか動かせない世界最強の兵器だ。それゆえに女性が男性を軽視する今の風潮（女尊男卑）が広まった。
「じゃあ何でＩＳが男性に反応しないのか。それは、『欲望の量』の問題だったのだよ！」
　束曰く、ＩＳは欲望の量が多ければ多いほど反応しやすいという。普通の女性が持ってる欲望は男性の持ってるそれよりも遥かに多い。いくら欲深い男性であっても女性が持つそれには遥か及ばない。だが、オーズの戦闘データを解析しＩＳのコアにインス

トールしてみた所、微弱だが反応を示したという。そして、バッタカンを通して一夏と話をした時、1つのＩＳのコアが起動に近い反応を示したと言うのだ。
「待ってください！まさか、俺が…」
「多分だけどオーズドライバーを使える2人目の人間じゃないかって話だねー。あ、こうちゃん。いっくん借りるねー」
束に連れてこられたのは地下訓練所。映司とアンク、里中とスクリーン越しの鴻上社長が同行する。
「いっくん、左手にガントレット付けてみて。そして、ガントレットに意識を集中して」
言われるがまま一夏はガントレットを左手首に装着するとガントレットに意識を集中する。
すると、ガントレットから眩い光が発せられ、頭の中に色々な情報が入ってきた。
目を開けると白い機械のような手足に背後には翼のような飛行ユニットが装着されていた。そして、腰を見ると映司さんのオーズドライバーによく似た物があった。
『素晴らしい！世界で最初の男性ＩＳ操縦者の誕生だ！』
鴻上社長は言うだけ言うとケーキ作りに戻ると言って里中さんと地下訓練所を後にした。
機体名：ヴァイスデザイア

世代：第三世代
武装
雪片弐型
メダジャリバーＮＴ
単一仕様能力（ワンオフアビリティ）
ＯＯＯシステム
零落白夜
ヴァイスデザイア…白い欲望？
「じゃあ次！武装展開行ってみよー！」
言われるがまま武装をコールする。雪片弐型はそこそこ軽く、剣道をやっている身としては丁度いいと思った。
問題はメダジャリバーＮＴ。コールした瞬間に物凄い重みを感じ、両手で何とか持てる感じだった。
「ドイツに行った時に要練習だな」
これは素振りの回数増やして体幹作る以外にないな。
「あ、でも余程のことが無い限りＩＳ使わないでね？」
「分かってますよ束さん。面倒事はもう沢山です」

　束さんからのプレゼント（という名の爆弾）を貰い、千冬姉と映司さん、アンクと合流してドイツ軍のＩＳ配備特殊部隊「シュバルツェ・ハーゼ」駐屯地に行くことになった。ちなみに、一夏が男性ＩＳ操縦者になった事は最重要秘匿事項になった事は言うまでもない。

　ドイツ軍で一夏、映司、アンクの３人は厨房で料理と皿洗いをやっていた。

　厨房で働いた後、一夏は千冬と実戦訓練、映司とアンクはグリードの気配に気を配りながら日々を過ごしていた。

　一夏達がドイツに来て１ヶ月過ぎたある日のことだった。

「織斑一夏はいるか？」

　一夏は厨房から出てきて声の主を確かめる。そこには自分より少し年下のような少女が仁王立ちで佇んでいた。ここにいる以上シュバルツェ・ハーゼの一員であるのは確かだろうが、こんな少女いただろうか？

「俺が織斑一夏だけど…!?」

　パァン!!

　少女の平手打ちを寸でのところでガードする。腰まで伸ばした銀髪と左眼に黒の眼帯をした少女は一瞬眉をひそませた。

「認めん。お前が教官の弟など、断じて認めん…！」
　それだけ言い残すと少女は去っていった。
「ありゃー。イチカ、とんでもない人に目をつけられたねー」
　シュバルツェ・ハーゼの隊員の1人が俺に話しかけてきた。
「誰なんです？あの子」
「私達の部隊の隊長、ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐だよ。オリムラ教官に心酔してるから世界連覇を逃した原因のキミのことを恨んでるんじゃない？」
　一夏と隊員が会話してる最中、映司とアンクはひそりと会話をしていた。
「(映司。さっきのチビ、ヤミーの親だ。それもお前が一番やりにくいタイプのな)」
「(え!?じゃあまさか!?)」
「(ああ。寄生型、恐らくカザリのヤミーだ)」
　映司とアンクはノルマを達成するとその少女のあとを追った。

ウサギヤミーと偽物の世界最強と白の覚醒

ジャラジャラジャラ……

「私はあんな男を教官の弟とは認めない！私がアイツを倒してそれを証明してやる！」

「そう、キミは欲望に従順だね。もっとその欲望に従順になりなよ。そうすれば、キミは織斑一夏を倒せる力を手に入れる」

ラウラの私室に金髪金眼の青年が佇んでいる。その背後には黄色の垂れ幕が下がっていた。

「これで私は織斑一夏を倒す、いや、殺す！」

「そうそう、その調子だよ…。もっとたくさんセルを溜め込んでね？」

そう言い残すと青年はその場から姿を眩ませた。

「私と勝負しろ、織斑一夏！」

「仕事が終わったらな」

??????????????????

俺は何故かラウラ・ボーデヴィッヒに勝負をふっかけられた。ある程度の戦闘訓練は千冬姉の手ほどきを受けているのでどうにかなるだろうと思いそれを承諾した。

「今すぐ、勝負しろぉぉぉぉぉ!!」
突然ラウラの周囲にメダルの塊が現れた。それはウサギの耳にウサギにあるまじき鋭い爪、そして、ウサギの足を持つ黒い怪人になった。
「えっ!?なんだコイツ!?」
「一夏、下がれ!そいつはヤミーだ。恐らくお前が狙いだ!」
アンクの叫びを聞いてその場を飛び退いた一夏。でもここは食堂だ。こんな場所で戦闘する訳にはいかない。
「面白い。こっちだ、化け物!」
一夏はウサギヤミーを挑発するとアリーナの方まで走り去った。
「待て、逃げるなぁぁぁぁ!」
それを追うウサギヤミー。そして映司はアンクの連絡を受けてアリーナに向かう事にした。
訓練用のアリーナの管制室。千冬は一夏を待っていた。遅い。1ヶ月訓練してきたが休みはおろか、遅れたことすらないのに。疲れが一気に来たのだろうか?
「仕方ない、一夏にも休養は必要だからな」
実は千冬はあの一件以来一夏及びマドカにかなり甘くなった。自分が観客席をキチンと見ていればこんな事にはならなかった。だから今は自分の目の届く範囲に一夏を

置いている。マドカは定期的に連絡を束から貰ってるから大丈夫の筈だ。
「今日は見逃すとするか…？」
ふとアリーナを見やる。すると、
「こっちだ！」
「待てぇぇぇぇ!!」
アリーナに一夏と黒いウサギのような怪人が姿を見せた。何だあれは!?
「映司さん！お願いします!!」
「一夏くん、囮ありがとう！」
一夏の入ってきた方向の反対側から映司とアンクが入ってくる。そして映司は懐からベルトのバックルの様な何かを取り出し、それを腰に巻きつけた。
「映司！これで行け!!」
アンクが映司に何かを投げ渡す。映司はそれを掴むとそれらをベルトに装填した。
（映司？何が起こるというのだ？）
映司は右腰のスキャナーの様なものを取り出すとそれでベルトをスキャンした。
「変身！」
『タカ！トラ！チーター！』
映司の体に変化が起こる。上から順に赤、黄、黄の丸い紋様が現れ、一つに重なって

胸に複雑な紋様を描いた。
タカを模した赤い頭部、トラのような大きな爪が両腕に格納されてる黄色い腕部、そして、チーターのような斑点が見て取れる黄色い脚部、これが束が言っていた…
『そう、あれがオーズ。えいくんが手に入れた大いなる力』
「束、いつから見ていた？」
管制室のモニターに束が映っていた。もう何も言うまい。
『えいくんが出てくる直前から！』
「そうか。ならあの怪物は何だ？」
束は少し言いよどむと質問に答えた。
『ちーちゃん、落ち着いて聞いてね？その怪物は、ちーちゃんの教え子のラウラって子の欲望が生み出したものだよ』
束が言うにはあの怪物こそが映司の敵であるヤミー、その中で最も戦いにくい寄生型と説明を受けた。
ヤミーには現状大きくわけて４種類存在するらしい。ウヴァというグリードが生み出す昆虫型、ガメルというグリードが生み出す重量級の陸上動物型、メズールというグリードが生み出す水棲生物型、そしてカザリというグリードが生み出す軽量級の陸上動物型の４種類。

その中でもカザリが生み出すヤミーは寄生型と呼ばれるらしく宿主に寄生したまま成長し、あわよくば宿主を飲み込む。映司は中学の頃からそうだった。自分が傷つくのは構わず他人が傷つくのは黙って見過ごさない、だから例えグリード化していてもその人ごとヤミーを倒すような真似はできない。

『だからこそ、メダルをあの組み合わせにしたんだよ。チーターのメダルの能力はその為のものだからね』

束がそう呟くと同時に映司の脚部が光った。そして、次の瞬間にはウサギヤミー（仮称）に肉薄し、連続蹴りをかましていた。

その動作には流石に反応できなかったのかウサギヤミーから銀色のメダルがどんどん溢れ出す。だが、

『貴様ぁ！私の邪魔を、するなぁ!!』

メダルが溢れ出ている場所からレールカノンの砲台が出てきた。気がついた時には遅かった。そして、それは映司をゼロ距離で撃ち抜いた。

「ぐあぁぁぁぁぁぁ!?」

映司がアリーナの端まで吹き飛ばされる。

助けに行かなくては。

でも私に何が出来る？

『ちーちゃん1つ忠告しておくけど、ヤミーはそのへんの訓練機じゃ絶対に倒せないから』

ウサギヤミーがその脚を利用して一気に映司の元に跳躍する。そして映司をそのまま締めあげた。

『火野映司…。お前も邪魔をするなら殺すぞ?』

「ぐぁぁぁ…」

このままでは映司が死んでしまう。どうすれば、どうすれば!?

「おい!ラウラ・ボーデヴィッヒ!」

その最中一夏が叫んだ。左手首に白いガントレットを巻き付けて。

「お前の相手は俺だ!俺と勝負しろ!」

ウサギヤミーが映司を解放する。そして、その中から銀髪で赤と金のオッドアイの少女、ラウラが出てきた。

「貴様はこの手で殺してやる。貴様を殺した後、マドカという奴も殺す!」

ラウラがドイツの第三世代機「シュバルツェア・レーゲン」を展開した。

そして、それは泥のようにラウラにまとわりつき、刀を持った人型を形どった。あの姿は正しく、

暮桜を纏っている私自身を投影しているかのようだった。

ウラが黒い何かに呑まれ、千冬姉と似たような姿になった時、俺は何かが切れる音がした。束さんから聞いていたＶＴＳ、正式名称ヴァルキリートレースシステム。モンド??????????????グロッソの優勝者の能力をコピーする今はアラスカ条約で開発を禁止されている禁忌のシステム。

俺を殺したらマドカを殺す？しかも千冬姉を形だけ真似したその姿で？

「お前ぇ…。これ以上俺の家族を侮辱するなぁ！」

束さん、ごめんなさい。日本に帰ったら何度でも謝ります。でも、俺は今だけでいいから力が欲しい！俺は左手首のガントレットを天に掲げた。

「俺の家族を守る為に力を貸せ、『ヴァイスデザイア』！」

俺はヴァイスデザイアを展開し、右手に雪片弐型、左手にメダジャリバーＮＴをコールした。

この１ヶ月、俺は千冬姉との実戦を通してメダジャリバーを片手で扱えるようになった。それに伴い、雪片との二刀流の稽古を千冬姉につけてもらっていた。

俺はメダジャリバーで牽制を仕掛け、雪片で攻撃する戦術を取ったが、ここで俺は自分の間違いに気がついた。

劣化してるとは言えあれは千冬姉のコピー、それも暮桜を纏っている全盛期だ。こん

な直情的な攻撃難なく弾くだろう。
　自分としたことが感情に身を任せすぎて冷静な判断を欠いた。予測通り、２振りの剣は黒い雪片によって弾かれそして、
　返しの一撃で俺の身体が切り裂かれた。
　零落白夜によるシールドエネルギー無効化攻撃、ここまで再現するとか聞いてない。
　胸から脇腹にかけてできた赤い線から自分の血が流れ出ていくのを感じる。
　あの時のマドカもこんな感じだったのだろうか。
『一夏！聞こえるか？聞こえているなら離脱しろ！』
　プライベートチャネルから千冬姉の声が聞こえる。
　またか？また逃げるのか？
　嫌だ、逃げたくない。俺は強くなると決めた。だから、頼む。
「力を貸してくれ！ヴァイスデザイアァァァ!!」
　刹那、ヴァイスデザイアがオレンジ色の輝きを放った。
　ウサギヤミーが映司を解放した瞬間を狙い、アンクは映司に１枚のメダルを投げ渡した。
「映司！ラトラーターでトドメをさせ!!」

映司はそれを受け取ると赤いメダルを黄色いメダルに入れ替える。一瞬ベルトが黄色に光ったのを確認すると、もう一度それをスキャンした。

『ライオン!・トラ!・チーター!・ラタラター、ラトラーター!!』

「ウオォォォォォ!!」

胸のオーラングルが全て黄色に染まり、頭部がライオンを模した黄色いものに変化した時、獣の咆哮の様な叫び声がアリーナに木霊した。

オーズの最強形態(コンボ)の1つ、猫系コンボ「ラトラーター」

それにウサギヤミーが気づいたが時既に遅かった様でトラクローを展開したオーズにそのまま一方的な攻撃を受け続けた。

それにより大量のセルメダルを失ったウサギヤミーはアリーナの中心で倒れ込んだ。映司はオースキャナーを取り出し、もう一度ベルトをスキャンした。

『スキャニングチャージ!!』

ウサギヤミーと映司の間に3つの黄色い円が現れ、映司はその円を潜りながらウサギヤミーに突進する。

「セイヤー!!」

円を潜る度に速度を上げていく映司に逃げられるわけもなくウサギヤミーはコンボにより超強化されたトラクローの一撃で爆発、その場には大量のセルメダルしか残って

いなかった。

「何とか…なった…」

サギヤミーが倒れるのを確認すると自身も変身を解除する。同色のメダルで行うコンボはとにかく体力をかなり消費する。慣れたとはいえ仕事の後に戦ったのだ。流石、映司はその場に倒れ込んでしまった。

ファイスデザイアの左手首の装甲が展開する。そこに3×7のメダルの様なパネルがセットされていた。赤、緑、青、黄、灰、紫、オレンジの7種が3つ…まるで映司さんのオーズドライバーのそれみたいだ。その中でもオレンジのメダルの1列が強い光を放っている。こうしてる間にも千冬姉モドキが俺に止めを刺そうとしている。俺は迷わずそれを左から順に指でスキャンした。

『コブラ!カメ!ワニ!ブラカーワニ!!』

すると、俺の全身からISの装甲が消え去り、頭を仮面のような何かが覆っていた。

この瞬間、オーズに隠されていたコンボのひとつ、爬虫類系コンボ「ブラカワニ」が発現した。

第2のオーズと爬虫類コンボと黒兎との和解

「何だ…？あの姿は…」

私は一夏の変化に度肝を抜かれていた。左手首の装置を指でスキャンした瞬間、映司と同じ変化が起きた。しかし、外見は全く違うものだった。頭部はターバンを巻くようにコブラが巻きついており、腕には亀の甲羅を二分割した装甲が付いている。脚部に至ってはワニ革を彷彿とさせる紋様が刻まれていた。

『アハハハ！凄いねいっくん！無断で起動させたから怒ろうかと思ったけど、えいくんが使えない筈のコンボを使えるとなるとそんなのどうでも良くなるよ』

「映司が使えないコンボ？どういう意味だ」

束曰く、映司もといオーズは頭部・腕部・脚部を全て同じ色のメダルに変えることで最強とも言える力「コンボ」を使えると言う。現状映司が使えるコンボは6つ。

昆虫系コンボ「ガタキリバ」、猫系コンボ「ラトラーター」、重量系コンボ「サゴーゾ」、水棲生物系コンボ「シャウタ」、鳥獣系コンボ「タジャドル」、そして初代が初めて変身したと呼ばれる「タトバ」

タトバコンボ以外は強力な力を秘めている反面その代償も極めて大きい。先程映司

がラトラーターに変身してヤミーを倒した後、倒れたのもその為。だが、
『あの３枚（プラカワニ）は徳川幕府が滅んでから全部紛失したって聞いてたんだけど…』
　束が珍しく頭を悩ませる。
「映司がオーズになる方法は理解した。では、一夏はどうやってオーズになっているのだ？」
『そんなの単一仕様能力（ワンオフアビリティ）のＯＯＯシステムに決まってんじゃん！』
　曰く、ヴァイスデザイアの左手首の装甲にはある条件を満たすと展開する様になっている。そこにはコアメダルを模した３×７のパネルが存在し、左から頭部、腕部、脚部の順にメダルパネルをタッチすることでオーズドライバー無しで変身可能とのこと。但し、オリジナルよりも力は落ちている上にコンボの反動は映司以上なので戦いが終わったら速攻医務室に連れていけと言われた。
　そして、ＯＯＯシステムの発動条件は
　心の底から力を望み、人を救う為ならどんな力も受け止める覚悟だと聞かされた。
　使い方が頭に直接入ってくる。
『無駄な足掻きだな。死ね』
　黒??然??????????????
　黒い雪片が俺の眼前に迫る。俺はそれをカメアームでガードするとそのまま仰向け

に倒れこもうとする。
　脚に意識を集中させ、左脚を軸にして右脚を雪片に向ける。右脚からワニのようなエネルギーが放出され、それをいとも容易く噛み砕いた。
　その体勢から左脚で思いっ切り後方に飛び、メダジャリバーＮＴを回収する。向こうも得物を取りに行こうとしたが、雪片弐型は生憎ヴァイスデザイアの武装だ。当然ヴァイスデザイアの拡張領域に量子化されて保管される。
「今、助けてやる」
　俺は頭に意識を集中させる。すると、コブラのオーラが顕現し、ＶＴシステムの足元に噛み付いた。
『う、動けない…!?』
　相手が動いていないうちにオースキャナーのレプリカをメダジャリバーＮＴにスキャンする。
『トリプル！スキャニングチャージ!!』
「ハアアアアア…、セイヤー！」
　俺は左半身を半身引いて抜刀術の構えを取り、距離を詰めた後ＶＴシステムを切り裂いた。同時にその中から少女の手が見えているのを発見した。
「届けぇぇぇぇぇ!!」

俺は少女の手を掴み、それをＶＴシステムから引きはがすと同時に意識を失った。

私は気がつくと廃工場の中に立っていた。そこには２人の少年少女が監禁されていた。誘拐犯と思しき人物が織斑千冬の名前を言っていた事から、この２人はあの忌々しき織斑一夏、織斑マドカだという事は容易に予想がついた。私はコンバットナイフを取り出し、織斑一夏を刺し殺そうとした。

すると、ナイフがそれをすり抜けた。

（何だこれは？幻術でも見ているのか私は？）

そんな事を考えていた矢先だった。

『その欲望、開放しろ』

「!?」

聞き覚えのあるセリフ。声は違うトーンだったから別人と判別できたが、それは人と呼ぶにはあまりにもかけ離れている存在だった。緑色の垂れ幕が背後にある怪人、それが私の感じたそいつへの印象だ。

怪人はメダルを誘拐犯に入れる。まるで私の時と同じ…

（待て？まさか、アイツは人間じゃないとでも言うのか？）

私も似たような経験をした。教官の汚点を排除する方法を探していた矢先に現れた

金髪金眼のその男は私にこんな事を持ちかけた。
『キミが欲望を開放するなら、キミが殺したいと思っている織斑一夏を殺す力が手に入る』
私は二つ返事で了承し、メダルを受け入れることにした。そして、その日の昼に宣戦布告の挨拶をかました…筈だった。いとも容易くあしらわれ、私は日に日に憎悪に身を任せていた。欲望に、憎悪に流された結果…
私は怪物になってしまった。
次に目にしたのは血の海だった。カマキリの怪人が少女、織斑マドカの心臓を貫いていた。彼女は恐らく織斑一夏を庇ってその犠牲になった。織斑マドカの事は認めよう、流石は教官の妹だ。余計に私は織斑一夏が許せなくなった。その時だった。
チャリン…
『寄越せ…。俺に力を寄越せ!俺は力が欲しい!力が無いから妹は、マドカは殺された!!力以外何も要らない、目の前の誰もを守れる力を寄越しやがれぇぇぇ!!』
ジャラ
メダルが積み重なる音が響く。それは織斑一夏から発せられていたものだった。不意に私は後ろを向く。私の背後にはメダルの山が積まれていた。

だが、織斑一夏の背後にはメダルの山なんてものではない。彼を中心に城でも作ってるかのようなメダルの量だった。少なく見積もっても私のそれより遥かに多いのは一目瞭然だ。

「ああ、そうか…」

私が織斑一夏を毛嫌いしていた理由がようやく分かった。私と彼は似ている。所謂同族嫌悪と言うやつだったのだ。

「俺の過去、どう思う」

不意に声をかけられて振り向くと、真っ白い空間に私と一夏は佇んでいた。あの頃の一夏ではない、現在の一夏だ。

「私は負けていたのだな…」

「ああ、グリードの力に頼った時点でな…」

「…一夏、私は戦闘用のクローンなんだ」

私は一夏の過去を知った。今度は私が一夏に過去を打ち明ける番だ。

「いや、お前の過去は全て見た。お前がクローンだという事も、ＩＳのせいで軍の上層部から失敗作の烙印を押されたことも全部。でも、俺はお前を否定しない。もし世界がお前を否定しても、俺はお前を肯定する！」

一夏が私に手を差し出す。私は一瞬迷ったが、恐る恐るその手を握った。

そして、一夏は私を自分の胸に引き寄せた。
「だから、もう泣いていいぞ？俺がお前の居場所になってやる」
その時、私の中の何かが壊れた。目から涙が溢れ出て、ひとしきり泣きじゃくった。
「私は、わた…し…は、戦いたくなんて無かった…。私は自由に生きたかった…」
私は
「うわぁぁぁぁん!!」
白い空間、私の鳴き声だけが木霊していた。
「あんまり泣くなよ、綺麗なオッドアイが台無しになるぞ？」
「お前は、嫌わないのか？」
「うん？だって綺麗じゃん、俺はお前のその目、好きだぜ」
その言葉の意味を聞こうとした時、突然眩い光が私の視界を奪った。
「う??? ??????????????? ここは…？」
「目を覚ましたか、ラウラ」
どうやらここは病室の様だ。ふと隣を見ると私の隣のベッドが膨らんでいた。
「全く、無茶をする輩だな。作動したＶＴシステムをぶっつけ本番で止めてしまうとは…」

「まさか、私の隣に寝ているのは…」
「一夏だ。全く、本当に無茶をする」
私は教官からことの顛末を聞かされた。その中には箝口令が敷かれている事柄が１つ存在した。
「織斑一夏がＩＳを動かせる…」
「それについては箝口令、それと、できる限り映司の事は伏せておいてくれ」
「それは、どういう事ですか？」
すると、教官の口からとんでもないことが明かされた。
「火野映司は１人でＩＳ操縦者の、それも国家代表を倒すくらいの力を有しているということだ」
私は文字通り開いた口が塞がらなかった。
「あれが私の知らない爬虫類のコンボか…、素晴らしい！織斑一夏くんは正しく第２のオ??ズとして相応しい人材だ!!里中くん、例のものを彼に届けてくれたまえ」
里中エリカは眉一つ動かさずパソコンのキーを叩いてドイツにあるものを届けるように手配した。
「さあ、これで欲望による世界の創造は更に加速する！これほど素晴らしいことはない

!!」

白い欲望を関するＩＳを織斑一夏が動かし、それの能力の１つ「ＯＯＯシステム」を起動させ、劣化コピーとは言え世界最強（ブリュンヒルデ）を打倒した。

「世界はこれから大きく変わる！女尊男卑という風潮が無くなるのも時間の問題、女性権利団体が動き始めるだろう。後藤くん、更識家の者とコンタクトしてくれ」

「分かりました、社長」

後藤と呼ばれた男性は命令されるとそのまま社長室を出ていった。

告白と帰国と青髪の姉妹

　ＶＴシステム騒動から数ヶ月が過ぎた。一夏は日常生活に支障がないまでに回復し、いつものように食堂に復帰することになった。そして、食堂にも１つ大きな変化があった。

「一夏、今日もいつものを頼む」

「了解、ラウラ」

　ラウラが毎日来るようになったことだ。隊員曰く、今の今までレーション以外口にしたのを見たことがないと言っていたが、今はそんな面影もない。ちなみに今作ってるのはＢＬＴサンドとコーヒーのセットだ。

「そうだ、今日訓練終わったらツーリング行こうぜ？」

「いいのか？」

「気にすんな、千冬姉には言っておくから。それに折角バイクの免許とライドベンダーがあるのに使わないのは勿体ないしね」

　一夏が勝手にＩＳを動かした日の翌日、一夏宛に大きな荷物が届いた。差出人は鴻上

ファウンデーションで荷物の内容はライドベンダーとタカカン、バッタカンがそれぞれ１０個入った箱だった。ついでにバイクの免許は動けるようになった後、ドイツで取れた。

「そうだな、楽しみにしてるぞ」

ラウラはそう言うとスキップしながらその場を去った。

「ラウラも変わったな。前まで訓練ばかりしていた狂人とは思えん変化だ」

「まあ、あれだけの事があったんだから変わって当然だろ。それと」

「分かってる、今日は特別に許してやる。明後日には帰国しないとならないからな」

「サンキュー、千冬姉」

「可愛い弟の頼みだ、断る理由も無かろう」

そう、俺、千冬姉、映司さん、アンクは明後日日本に帰国する。千冬姉はＩＳ学園の教師として赴任、映司さんとアンクはいつも通りヤミーとグリードの動向探りと討伐・メダルの回収、俺は元の学校に復学することになった。復学する頃には受験シーズン真っ只中だろうということからこの１年間で千冬姉から高校１年までの勉強をみっちり教えられた。

「今日の夕方の訓練は無しだ。ラウラと楽しんでこい」

意味深な笑いを浮かべて千冬姉はその場を去った。

日が沈んで辺りが真っ暗な頃、俺とラウラは夜の何も無い道でライドベンダーを走らせていた。ライダースーツ越しに感じる風がとても心地よい。

訓練所からそう離れていない草原に並んで寝転ぶ。人工的な灯りが殆ど無いこの場所からは星ぼしと月の輝きがとても鮮明に見えた。

「一夏とも明後日でお別れなのか…」

「長いようで結構短かったな」

最初の頃はこんな関係になるなんて思いもしなかった。すると、唐突にラウラが立ち上がった。

「一夏、お前に言いたい事があるんだ」

「どうした急に？」

身体を起き上がらせた時、それは起きた。

「私は、お前が好きだ」

唇に柔らかい触感が伝わる。数秒後、俺は何をされたのかやっと理解した。

キスをされた。しかも、ファーストキスを。

「ありがたく思え。私も初めてだからな」

「そうか、俺の初めてがラウラみたいな可愛い子って、俺って幸せ者なのかね」

「か、可愛いって、私が!?ほ、本気で言ってるのか?」
おーおー、動揺が隠せてない。メチャクチャオドオドしてらっしゃる。でも、
「俺もラウラの事、好きだよ。次会う時はもっと女の子らしい格好見せてくれよな」
「ああ約束する!大好きだぞ、一夏!」
星ぼしと月の輝きをバックに俺とラウラはもう一度キスを交わした。2度目のキスは少し甘い感じがした。

そんな彼らをバッタカン越しに見ていた2人の人物がいた。
「青春っていいよね。俺って高校卒業した後は放浪ばかりしてたからさ」
「すまないな、映司。カンドロイドもタダじゃないのに」
その人物とは千冬と映司だった。実は一夏が間違いを犯さないかと心配した千冬は映司に頼んでタカカンとバッタカンで2人を追跡してもらってた。
「でも一夏くんならキスまでで終わるんじゃない?」
「それで終われればいいがな…」
「何?ひょっとして一夏くんが羨ましい?」
「そ、そんな事は…!」
無いとは言いきれない。確かに私も20代前半までに理想の男に会えればいいとは

思っているが、そんな男そう簡単に会えるはずが…、
「千冬ちゃんなら大丈夫、綺麗だからいい人絶対見つかるって」
　胸の鼓動が高鳴るのを感じた。いつの間にか私は映司の顔を直視できないでいた。
「そんな台詞をよく言えるな…」ボソッ
「千冬ちゃん?」
「何でもない、もうカンドロイドは使わなくていいぞ」
　真っ赤になっている顔を映司に見せないようにしながら私は自室に戻ることにした。
映司、あいつも以前の一夏に負けず劣らずの朴念仁みたいだ。
???????帰?????????????
　帰国日当日。ドイツの国際空港で俺達はシュバルツェ・ハーゼの皆と別れた。ラウラに蛍?ては俺に抱きついてなかなか離れてくれなかった。ラウラからの選別として1本の刃抜きしたコンバットナイフを貰った。正直持ち物検査に引っかからないか不安だったが、何故かスルーされた。まあ、あれで人を切る事は出来ないからだろうけど…。
　そして、飛行機に揺られて日本に到着。千冬姉はそのままＩＳ学園に向かった。映司さんとアンクはヤミーとグリードを探しに行動を開始した。残された俺は空港である人の迎えを待っていた。
「さて、更識刀奈さんと更識簪さんはどこかなー…?」

「私達用事があるの。邪魔しないでくれる？」
ふと声がした方を見る。すると、チャラチャラした男数名に青髪の少女が２人囲まれている。
「イイじゃん、オレ達と遊ぼうぜ？悪いようにはしないからさ？」
男達の手が少女達に伸びようとした時、俺は既に行動に出ていた。
「俺の連れに何か用か？」
男達と少女達の間に割って入る。
「ああ？んだテメェ!?」
「邪魔すんな！」
チャラ男の拳が俺に迫るが、いっつも千冬姉（世界最強）と１年も手合わせしていたせいか、それがスローモーションに見えた。まあ、敢えて殴られてやるけど。
ゴツンと鈍い音が響き、唇を切ったのか僅かに口元に血が滲んでいた。だが、
「これで正当防衛成立だな？」
俺は懐からコンバットナイフを取り出し、それを逆手で構え、左半身を半歩下げる。
「ひっ…」
「お、覚えてろー!!」
三下臭い捨て台詞を言うと男共は蜘蛛の子を散らすかのように逃げていった。俺は

ナイフを回転させながら懐に納刀する。
「その近接格闘スタイル、もしかして貴方が織斑一夏くん？」
「となると、貴女方が更識刀奈さんと更識簪さんですね？」
何故格闘スタイルでそんな事が分かるのかは敢えて聞かないでおこう。
「そう。私達更識家が今後、貴方の身柄を保護するわ。ちなみに、私が刀奈、こっちが簪ちゃんよ。これからよろしくね一夏くん？」
「よろしくお願いします。刀奈さん、簪さん」
中学3年の受験シーズン、俺は身元の安全確保の為にも更識家にお世話になることになるのであった。